

第4回京都市美術館評議員会「将来構想検討委員会」 摘録

日 時：平成25年12月26日（木）午後2時～午後3時45分

場 所：京都市美術館2階応接室

出 席：太田垣 實委員，梶谷 宣子委員，加須屋 明子委員，川嶋 啓子委員，高橋 信也委員，建畠 哲委員，布垣 豊委員，福本 双紅委員，細見 良行委員，松尾 恵委員，
蓑 豊委員，

門内 輝行委員，奥 美里委員（文化芸術担当局長），潮江 宏三副委員長

（欠席）内山 武夫委員長，上村 淳之委員，倉森 京子委員

事務局：森川 佳昭文化芸術都市推進室長，鋒山 隆美術館副館長ほか

1. 開 会

2. 挨 拶

潮江 宏三副委員長（内山委員長欠席のため）

3. 議 事

議題1 京都市美術館将来構想中間まとめ案について（事務局説明）

I 輝かしい伝統を継承し，世界に誇る美術館であるために～創建80年目のリノベーション～

II 現代の美術館に求められるもの

III 京都市美術館が誇る類まれな強み

IV 京都市美術館の課題

V 京都市美術館の目指すべき方向性～世界に冠たる美術館を目指して～

VI 目指すべき方向性を実現するための具体的方策

VII 京都市美術館の再整備 ～伝統と革新の融合～

VIII 運営体制の整備

議論

I 輝かしい伝統を継承し、世界に誇る美術館であるために

～創建80年目のリノベーション～

- ・ リノベーションというのは英語の語感としては規模が小さい。もっと夢のある、適切な日本語で。
- ・ どのくらいの規模でこの美術館を変えていくつもりなのかがわからない。私自身は美術館だけではなく、全体をアプローチから変えてもらいたいと思っている。
- ・ 市長の思いとしては抜本的に変えたいので、夢のあるプランを出してほしい。
- ・ 書き出しの構え方が小さい。3頁の世界の文化首都という方がスケールが大きい。20世紀工業化社会の入り口で美術館を作ったが、21世紀知識社会にアートの重要性が高まっている今、それを理念として謳っている「世界文化自由都市」の事業を先導する、というような大きな構え方をすべきだ。
- ・ 「所蔵品だけで様々の観点からの質の高い展覧会が開催できる」と書くと、もう所蔵品は十分でこれ以上要らないと受け取られるので、表現を変えるべきだ。

II 現代の美術館に求められるもの

- ・ フュージョン・アートという言い方はあまりあまりしない。インタラクティブ・アートも「センサーによって鑑賞者が関与できる」だけではない。こういうことを書くと、エンターテインメント性が強調され、当美術館が遊園地化するかという誤解につながるものが心配。
- ・ 各ジャンルを融合したような芸術も出てきたということ、鑑賞者が「アートの創造に関与できる」タイプのアートも出てきて、概念が広がってきているということをごここでは言いたい。エンターテインメント性も大事なのだが、それだけを強調するつもりはない。
- ・ 美術の世界は、ここに書かれているように、非常に多様化し、作品も大規模化し、オフ・ミュージアム、美術館の外で、自然のなかで展示される、サイトスペシクと言われるような傾向が強まっている。他方、京都のまちは世界文化遺産があちこちにあって、まち全体が美術館と言われるように、そういう作品を展示する空間が沢山ある。京都市美術館はそういう活動・企画ネットワークの中心となるような存在になっていただきたい。
- ・ そういうオフ・ミュージアムという方向もあるが、それをメインにすると、この美術館は永遠に救われぬ。その前にこの美術館の中に現代美術を展示できる空間、ホワイトキューブを持たないとだめだ。まずそれを実現して、人材を育てて

から、そういうことを考えるべきだ。

- ・ 欠けているホワイト・キューブをまず補おうというのは理解できるが、京都全体のそういう可能性を背景として背負っているのだという認識を持ったうえで、それをやっていただきたい。
- ・ 京博、近美との分担と連携が最大の課題と考えているのに、それが混ざっているような気がする。
- ・ 京博の役割は明確に違うので論ずるまでもない。近美は発足当初京都の工芸と日本画の振興をサポートするという方針を持っていたが、今それは持っておらず、全国的視野で活動している。だから、京都の美術・工芸の振興は当館に期待されている。
- ・ 市立芸大はじめたくさんの芸術大学があり、それらとの連携も考えることが大事だ。
- ・ おっしゃる通りだ。卒業制作展にスペースを貸すだけではなくて、優秀な卒業生をピックアップして企画展をすとかそういう活動をやっていく必要がある。現代美術を展示するホワイトキューブが京都には殆どない。まずそれを作る必要があると思っている。美術教育などについても、大学の人材との連携が必要だと思っている。
- ・ いま言われたそのことをもっと鮮明に打ち出してはどうか。いろんな意見を羅列すると、総花的になり、そういう方向性が薄れる。京都市美術館「ならでは」という点を強調すべきだ。
- ・ 現代美術館化には懸念を持っている。あくまで歴史的な環境のなかでの京都の美術・工芸作家を見守る役割を忘れないでもらいたい。
- ・ 一般論ではなくて、芸大の崇仁地域への移転など、京都の状況を、固有名詞を入れて書いたほうが良いのではないか。
- ・ 美術館概念の変化ではなく、美術館機能の変化だ。この図についても表現についても異論がある。

Ⅲ 京都市美術館が誇る類まれな強み

Ⅳ 京都市美術館の課題

- ・ 3 ページの 4 “自然光を取り入れた展示室は、「日本で最も作品が映える美術館」と評価されている。”の部分はそれ自体はいいのですが、これだけだとすべての展示室がそうであるかのような誤解をうけるので、作品保護のために人工の光を使う展示室もあることを記述してほしい。
- ・ Ⅲの京都市美術館の強みの部分では実際評価されているのでこのままの表現にし、後の「施設の再整備」に関するところで、幅広く展覧会を開催していくた

めに、作品保護のため人工の光の展示施設も整備するという記述を加えるということによいのではないかと思う。

- ・ 建築における最近の環境整備技術はずいぶん発展している。今の強みだけでなく、将来どうしていくかということも含めて書き込んでいけばずいぶん変わると思う。
- ・ 「コレクションの保全と管理」がまったく抜けているのはどうかと思う。
- ・ 収蔵庫だけではなく修復用の空間がいる。
- ・ 市の美術館だから市民が収蔵品を持っていると考えられる。市民が勉強をしたいと思ったら、それに応えなくてはならない。倉庫の隅で見るというのではなく、作品を見られる部屋を新たに作ってほしい。
- ・ 美術館を基本的に文化財として指定されるのかどうかに触れられていない。将来どうなるのか、それによって変わってくる
- ・ 11 頁に「本館は、将来的に文化財指定を視野に入れ」としている。現段階で確実とは言えないが、指定をめざしてこの建物を残していきたい。3 回の検討委員会でご提案いただいた新しい機能を持つためには、別途新しいスペースを充実させていかなければならないと考えている。
- ・ 美術館がそういう考えでスタートするなら、それでよい。周辺環境もふまえて、将来、文化財指定をとるというのなら、その方針で考えていかなければならない。そのことはスタート時点で大変重要な問題だと思う。
- ・ 収蔵庫の建て替え、および収蔵庫だけでなく修復できるスペース、公開できるスペースを整備するということをはっきり書きこむべきだと思う。
- ・ 3 ページの 4 “自然光を取り入れた展示室は、「日本で最も作品が映える美術館」と評価されている。”というのは事実とはいえないと思う。「評価されていた」とすべきで、現在でもそれが使用されていることは評価できると思うが、少しオーバーな表現かなと思う。
- ・ 自然光の採光の評価については、一般公募展で言われていることで、主催展での水彩画や繊維関係の作品の展示においてはまったくちがう。この部分の文章表現は説明が不足している。
- ・ 全体として、数字の部分は具体的に書かれているが、そうでない部分は感覚的で解釈の幅が広すぎると思う。全体として中間まとめの書きぶりを精査してほしい。
- ・ III の 3 で京都画壇の画家だけの名前が羅列されていて、あとは陶芸・漆芸・染織などの分野となっているのは大変不公平だ。京都は工芸あつての町と思うので、ぜひ工芸家の個人名を入れるなりしてほしい。

V 京都市美術館の目指すべき方向性 ～世界に冠たる美術館を目指して～

VI 目指すべき方向性を実現するための具体的方策

VII 京都市美術館の再整備 ～伝統と革新の融合～

VIII 運営体制の整備

- ・ VIIの2で「新館建設による新たな展示スペース」、「新館の建設にあたっては・・・」とあるのが唐突な感じ。新館のイメージがわからない。具体的にどんな建物でどこにというのが把握できていない。
- ・ 財源の問題もあり、どこにどれぐらいの大きさでということのはっきり決まっていない。どれぐらいのスペースが必要か検討しなくてはならない。ここでは岡崎地域が過去から未来に向けて文化交流ゾーンとして、伝統と革新の融合によって発展してきた。そのことをソフトもハードも含めて表現している。スペースについての具体策と理念とが一緒になっているので、もう少し文章表現を改善したい。
- ・ 常設展示や企画展示をするスペースがないから新館をつくるのではなく、現代美術などの展示内容を充実させるためプラスしていくという考えで新館建設があるという表現にしたい。現実には常設展示は本館で行うつもりであり、常設展示のための新館ではない。
- ・ 本館について重文指定をめざすならば、リノベーションに大きく関わる。新館で新しい機能を充実させることはよいことであり、新館をつくることを前提として、本館は重文指定をめざすのはよいと思う。ただ、もし新館のめどが立たず、本館でその機能を満たさなければならないということになると、微妙な悩ましい問題が生ずる。
- ・ そもそもこの検討委員会で新館が必要という提案をしなければ新しい施設はできない。タイムスパンが問題で長期的かつ短期的な時間の流れを整理し、岡崎地域全体との連携も考えて、建設のステップを考えていく必要がある。新館が100年後にできるのか、すぐできるのかでは大きな違いであるが、建てるという意思を持ってないと建たない。もし、大型予算がついた場合、早く実現する可能性があるが、建てる意思を書き込んでおかなければ建たないし、逆に新館建設が岡崎全体の発展を阻害するようなことになってはならない。
- ・ スペースとして新館が必要ということを経営委員会の意見としてよいか。
- ・ 別項目として新館建設を書いたほうがわかりやすい。
- ・ 新館をつくることだけではなく、新館建設も含めて、美術館全体を新しく育てていくという表現がよいと思う。
- ・ 現実の政策のなかで様々な配慮は必要であるが、動きが見える提案でないと意味がない。再整備の1つの解決策として、本館のリノベーションと新館建設が

必要だということぐらいは、委員会の総意として言ってもいいのではないか。

- ・ 「検討する」という表現はやめて、「こうしたい」という表現にすべきだ。検討するのは市の方で、委員会は「こうしたい」という表現でよい。